

## 学生の意識調査結果からみた介護技術教育の重要性についての考察

### Study on the Importance of Care Technique Education through a Student Awareness Survey

横山 孝子\*<sup>1</sup>・高遠 三和\*<sup>2</sup>・中山 和子\*<sup>3</sup>

Takako Yokoyama, Mituwa Takatou, Kazuko Nakayama

#### I. はじめに

2001年度より本大学において初めて介護技術Ⅰの授業が開始され、専任教員として看護職2人と非常勤講師により担当することとなった。教科書と実技教室の教材・設備などを考慮し、現実の地域が求めている状況などを合わせ、福祉専門職に最低限必要な内容を取り入れ、授業運営を行ってきた。

授業は1年次生のほぼ全員の必修で（編入生で単位取得者のはのぞく）、半期に2時限連続で7回の授業を、6クラスに分けて実施した。1クラスは46人前後で、ベッドサイドの実技指導には、教員が3人は必要で非常勤看護職の応援で実施してきた。

授業のたびに振り返りレポートを出させ、授業の満足度、理解度、意見感想などを聞き、次回からの内容や取り組みを改善してきた。（実際当初は60人の4クラスであったが、40人6クラスに改善してもらい、習熟度を増す工夫をしてきている。）

内容は3年次の実習で遭遇する事の多い、コミュニケーション技術やグループワーク、ベッドから車椅子への移乗や移動、食事・入浴・排泄の介助、記録と報告などを重点に、社会福祉士の相談業務においても、相手の事情が受け止められ、悩

みの度合いが理解できる力をつけさせるための、最低限の技術の習得に努めてきた。

今回、前学期4クラス163人の介護技術Ⅰの授業の終了時に行った理解度チェック（紙飛行機による意見交換を含む）から、学生の意識についてまとめたので報告する。

#### Ⅱ. 研究目的・研究方法・研究対象

##### 研究の背景

2000年度長野大学の福祉学部のカリキュラム編成において、日本の特に農村地域の高齢化の急速な進展状況と、介護保険制度の施行に伴う福祉現場の業務内容の変化などを鑑み、福祉教育の中に介護技術の実技演習を含めた「介護技術Ⅰ・Ⅱ」の授業が導入された。そして今や老人も障害者も病気を持った高齢者が増えており、介護と言うより看護や医療・保健の考え方をふまえた、現場での実践力を高める教員の要請と言うことで、看護職が採用された。

介護技術の科目の位置づけは、当授業の単位修得が2年次以降に行う現場実習に進む必修条件となっており、実習において具体的に利用者と向き合う会話や、食事・排泄・入浴の介助、レクリエーション、さらに事故防止や危機意識を養う事などが、重要と説明を受けた。従って、それらを内容に盛り込んだ授業展開をはかり、期末時には

\*1 社会福祉学部助教授

\*2 社会福祉学部講師

\*3 非常勤講師

全体授業に対する評価を細かくとり、次年度の改善課題にしてきた。

今回5年目にあたり介護技術Ⅰの授業の総括として、以下の研究課題と研究方法により、学生の意識調査などを実施し、介護技術の授業の考え方をまとめたので報告したい。

#### 研究目的

- ①授業内容に対する学生の理解度・満足度を見る
- ②介護技術の授業の必要性についての学生の意識
- ③実習現場および就職先における技術の需要状況
- ④現場実習前教育としての授業の位置づけ・適性時期の検討

研究方法 研究対象：2005年度前学期 介護技術Ⅰ受講生 4クラス163人  
実施時期：2005年7月 各クラス授業最終日

#### 調査項目

- ①授業の理解度と進め方などの評価、学んだ内容の意見感想
- ②授業開始時と終了時の各自の意識の変化
- ③社会福祉士が介護技術を学ぶ意味についての意見交換結果
- ④長野大学福祉学部卒業生の3年間の就職実態
- ⑤福祉職場（知的障害者施設）における入所者の状況と業務実態

表1

#### 授業の感想

介護技術を幅広く多くのことが学べた  
これからの実習が楽しみに  
減多に出来ない技術の実習がやれて良かった。  
介護される気持ちも体験でき、介護の重要性が分かった  
楽しく学べた。これからのいかにしたい。  
今までの見解が改善させられる内容。  
話し方が優しい。思ったことと実際が違い考えさせられることが多い  
技術を体で覚える授業で楽しくできた  
グループワークで他者から学べた自分の考えだけではだめ  
グループワーク良い ADL を変える技術  
グループワークで意見が言えるようになった  
グループワークがはじめより出来るようになった  
もっとグループワークをして欲しい  
この授業でしか学べないことが多くあった  
介護に対する自分の意識が大きく変わった  
現場の体験談がためになる  
介護のあり方を考えられ授業で学べて良かった  
アセスメント技術が難しかった  
専門的なこともあり大変だったケアプランなど  
難しい言葉に戸惑ったが考えさせられる授業だった  
内容の濃い授業でとてもためになった  
実技と知識の勉強で良かった  
利用者の気持ちや力を生かすケアが学べた  
自分の将来のために役立つ授業だった  
沢山重要なことが学べて良かった  
生徒に意見を求め一生懸命改善しようとしてくれる  
参加して学べる  
介護を一から学べる  
介護技術は奥が深いと思った  
技術の時間が足りない 授業の大切さ分かった

### Ⅲ. 研究結果とその考察

#### 1. 2005年度 介護技術Ⅰの授業内容に対する理解度と授業運営に対する評価

1) 授業の総体的な感想を見ると図1・表1の如く、「内容が濃かった」「面白かった」などが多く、さらに各個人が自由記載した内容を、評価としてまとめると、図2の如く「基本的なことを身体を通じて理解できた」「学生の参加しやすい工夫で楽しく学べた」「介護の考え方が広がり考えさせられた」など、ほぼ満足という評価が寄せられている。「大学に来て初めて福祉らしい勉強が

出来て良かった」と、振り返りレポートに記述する学生も見られた。

2) 自分にとって良かったと思われる授業を聞くと、図3に見るように体位変換・移乗や、食事援助、車椅子体験、ブラインドウォーク（目隠し体験）などであり、さらにコミュニケーション学習に合わせて行った「自己分析」で、「自分の状況が分かって良かった」と言う学生が、20%と思ったより多いことも分かった。自己分析結果による学生の傾向は後半で述べる。

3) 次に授業の進め方への評価を見ると「変化が

あって良い」が73%、「忙しかった」が10%となっている。これは1回が2時限すなわち3時間の授業のなかを、講義・実技・グループワークの3段階の形式で、各単元を完成させるので、その形態の変化と、その都度書かせるレポートのために、タイムスケジュールが厳しく配分されていることから、変化に富んではいるが、中には忙しく進んでいく事への、受け止め方の違いがあると考えられる。この忙しさを「充実していて良い」ととらえる学生も多い。(図4)

4) 全部で7回の授業の量と授業時期に対して、「良い」という学生が61%はいるが、「時間数が少ない」、「半期でなく通年にして欲しい」という

意見も3割近くに見られた。

しかし、現場実習は3年次の夏からであり、1年間のブランクがある。技術は使わなければすぐに力を失ってゆくものであり、教員側でも介護技術1の授業は1年次の授業でよいものか、気がかりになっていたが、やはり授業時期については、「1年次では実習までに忘れてしまいそう」38%、「半期ではなく1年間の通年授業にして欲しい」19%、さらに「2年次にも技術2を続けてやって欲しい」15%などが出され、7割以上の学生がカリキュラム上の改善を求めている。効果のあがる授業配置が必要と考える。(図5.6)

#### 介護技術1 授業展開の評価 紙飛行機意見交換

介護技術1の授業の終了にあたり おたずね

調査対象者 長野大学1年生 163人  
介護技術1の授業受講者  
4クラス63人について

実施時期 2005.4～7月

図2 授業に対する評価

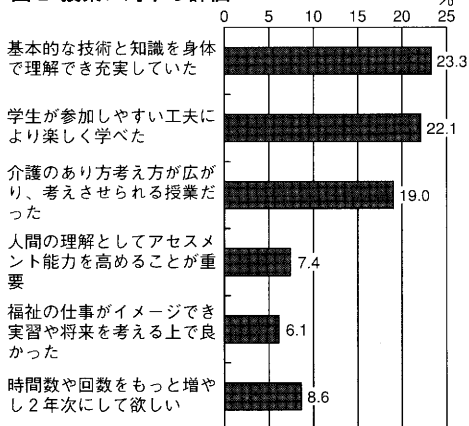


図6 授業実施時期についての意見

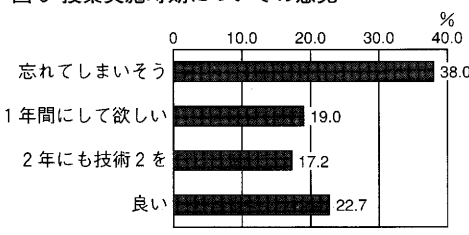


図1 授業全体の感想

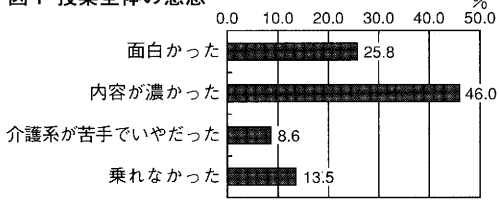


図3 自分にとって良かった授業

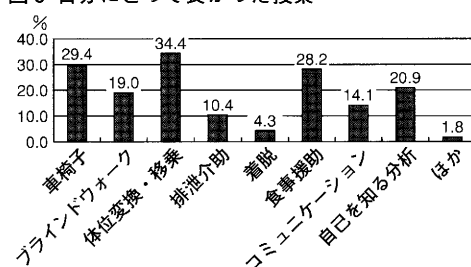


図4 授業の進め方

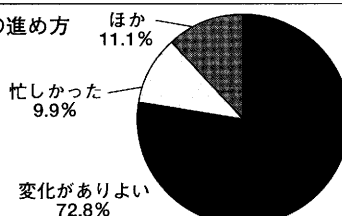
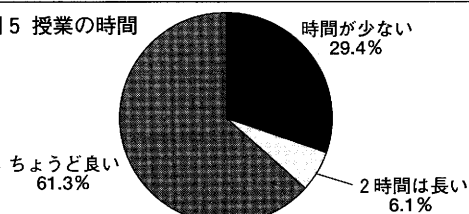


図5 授業の時間



## 2. 「介護技術Ⅰ」の授業の開始前と後の意識の変化

授業において、各日常介護の技術援助にあたり、移動や食事などの各ケアワークごとに、「コミュニケーション技術」や、連携のための「グループワーク」、残存機能の理解も含めた「自立支援の考え方」を導入し、それぞれの力をつけるようにしてきた。そこでこの3項目について、授業開始時の様子と授業最終日における、学生の意識の変化を比較してみた。

### 1) 「コミュニケーションワーク」(図7 a. 7 b)

受講前では、「コミュニケーションにも技術があるとは思わなかった」などが35%以上に見られ、また「コミュニケーションが大切だとは思わなかった」や、「人と話すことが苦手」などと言う学生が26%にも及んでおり、教員の方が途方に暮れる思いであった。しかし受講後の考え方では、「この授業は重要だ」「もっとコミュニケーション技術を学びたい」などが各々約60%に見られ、18%の学生は「自己理解が出来て良い」とも言っている。

### 2) 「グループワーク」(図8 a. 8 b)

グループワークの導入については、受講前には「今までやったことがなく戸惑う」41%、「福祉に必要なとは思わなかった」12%、「こういう事は元々嫌いだ」13%、「仕事は1人でやればよいと思っていた」4%などと、思った以上に授業前の「チームケアへの意識」は低かった。授業の回数を重ねた結果最後では、グループワークにおいて、「他の人の意見で学ぶことが多かった」45%や、「1人では出来ない仕事だと分かった」51%、「福祉の仕事にはチームワークとして必要だ」40%などと意識が上がっている。「嫌だった」「やはり苦手」も若干いるが、「楽しかった」という声も多く示された。

### 3) 「自立支援」の考え方(図9 a. 9 b)

つぎに「自立支援」の考え方では、介護は「全てをやってあげるのかと思っていた」37%、「優しければよいと思っていた」21%、「技術的に上手に介助すればよいと思った」17%などといい、「自立を支える」という意味の理解がないことが分かる。

授業後になると「持てる機能を活用すること

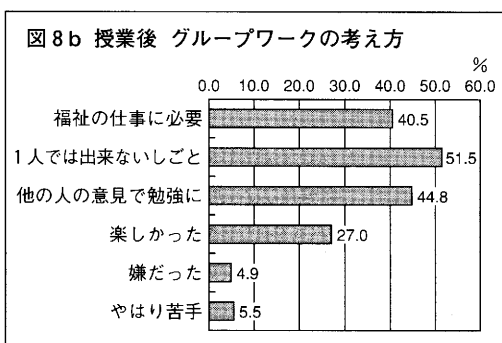
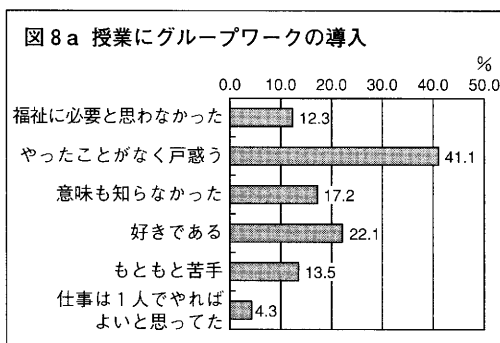
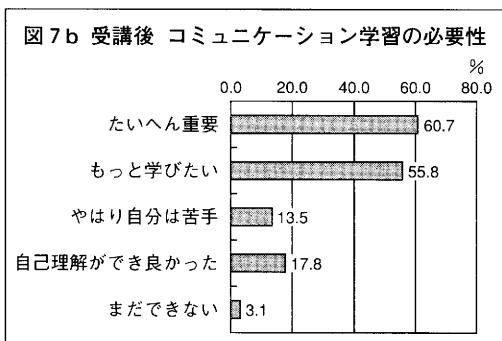
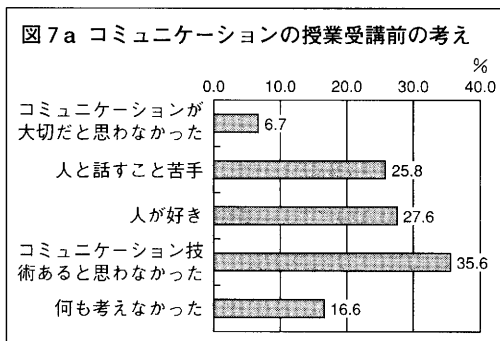


図9a 授業前の自立援助の考え方

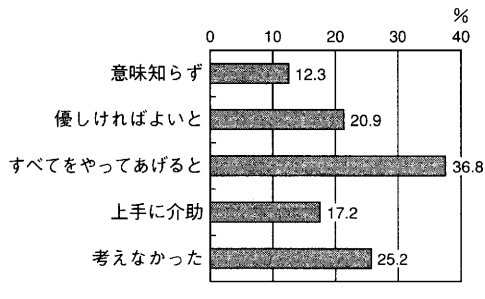


図9b 受講後 自立支援の理解

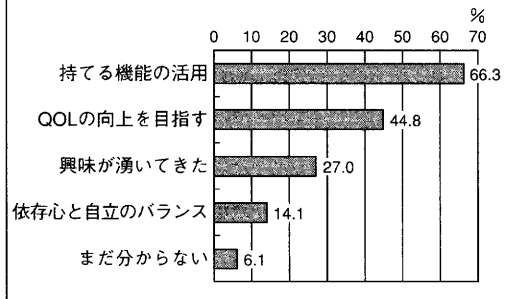


図10a 受講前の介護技術の考え方

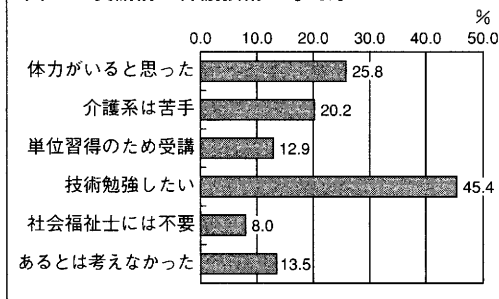
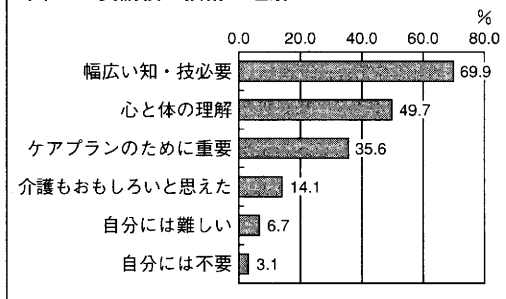


図10b 受講後の技術の理解



だ」66%、「その人のQOLの向上を目指すことが大事だ」45%、さらに介護や福祉に「興味が湧いてきた」27%などというように変わってきている。

#### 4) 介護技術授業への理解・考え方(図10a・10b)

「介護技術」の授業への考え方では、当然「これを学びたかった」は45%と多いが、「体力がいたと思っていた」「介護系は苦手」がそれぞれ20%、「単位修得のため」13%、「社会福祉士には不要だと思っていた」8%などという学生も多かった。

しかし受講後になると介護技術には「幅広い知識や技術を要する」70%、「心と身体を理解が重要だ」50%や、「ケアプランを立てるには重要なことだ」35%と言うようになり、「介護も面白いと思った」14%などという学生もでてきている。

### 3. 介護技術の必要性の理解

#### 1) 「社会福祉士が介護技術を学ぶ意味」

授業時に全員で、自分で考えを書いたあと、これを紙飛行機にして飛ばし合い、前の人の意見を参考に再度意見を書く方式の、意見交換後の考え

方をまとめた。ほぼ全学生が自分の意見を書いており、この主な意見の生の声は資料編に示すが、その内容を5分類してその傾向を示すと、「社会福祉士が介護技術を学ぶ意味」は、次のようになった。(図12・表2)

- ① 高齢者・重度者の増加に伴い、介護技術を要するケアが必要になる 35%
- ② 利用者の理解とそのニーズに沿った、自立支援のケアプランの立案・実施には欠かせない 24%
- ③ 頼りにされる相談業務をするには具体的なケア指導が必要だから 21%
- ④ チームケアの福祉現場ではケア職員などと対等に共通課題の理解とケアの向上をはかりたい 16%
- ⑤ 家族や介護している人の理解と、適切な助言のために技術は重要 5%

などで、1年生の入学したての前学期の学生の、半年間の変化としては、授業効果の見える、重要で面白い結果と言える。

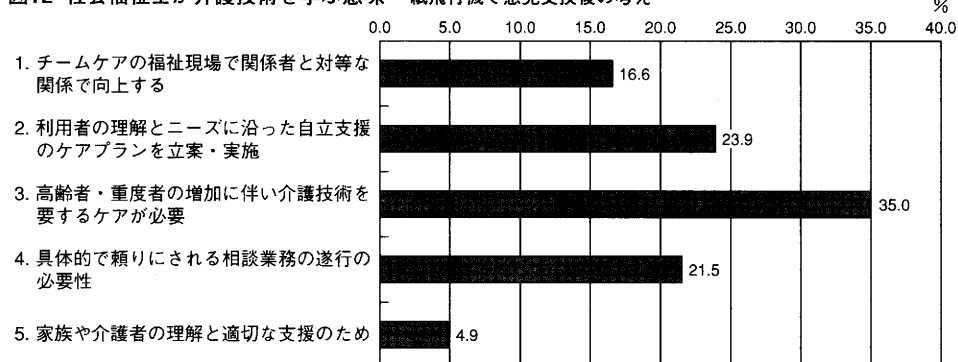
#### 2) 「社会福祉士にとって介護技術は必要か」

授業終了時の総合的な考え方として、介護技術

表 2

社会福祉士が介護技術を必要とする理由		163人の意見
		紙飛行機で意見交換したあとの意見
1. 福祉はチームケアであり現場の関係者と対等な関係で良い仕事をするため		27
人の多様な悩みの理解と対応のための基礎的機能として介護力は必要	21	
相談業務は他職種との連携で築くので介護の知識技術は不可欠	5	
現場での人間関係が充実した援助につながり、チームの力を高める	1	
2. 利用者の理解とニーズに沿った自立支援のケアプラン立案・実施のため		39
利用者の悩みや苦労を理解するために介護技術がないと出来ない	5	
人と関わる仕事は触れて対話しないと相手の立場に立った仕事にならない	10	
介護技術はコミュニケーションの手段となりアセスメントを可能にする	5	
残存機能を活かしたケアプラン作成のため	11	
ひとり一人のニーズに沿った自立支援の計画化	8	
3. 高齢者・重度者の増加に伴い介護技術を要するケアが必要になる		57
高齢者や認知症の人が増えるのでケアも必要になる	12	
利用者の権利を預かり生活を支えるには技術も伴う必要がある	4	
高齢者の現場ではデスクワークのみでは意味がない	21	
人命を預かる以上怪我やミスを防ぐ上でも技術が重要	10	
緊急時対応などあらゆる危機管理の理解のためにも	6	
知識があっても実践力がないと頼りにされない	4	
4. 具体的で頼りにされる相談業務の遂行のため		35
適切な助言には介護技術が駆使できないといけない	25	
その人全体を見て深い対応するために実践力が重要	4	
安堵感を与えるこころのケアには介護技術が伴う必要がある	6	
5. 家族や介護者の理解と支援のため		8
介護する人の立場の理解・共感が出来るため	4	
介護者に楽に楽しく介護していただく助言指導が必要	4	

図12 社会福祉士が介護技術を学ぶ意味－紙飛行機で意見交換後の考え－



は社会福祉士にとって必要と考えているかを聞いた結果では、94.5%の学生が「大変重要」と答えている。これは大きな認識の変化であり、授業効果と考えられる。(図11)

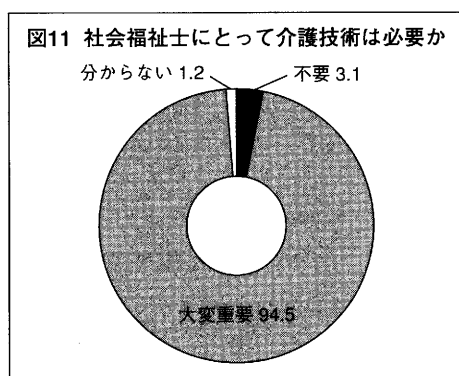
#### 4. 「福祉系を選んだ理由」と学生の「自己分析結果」

さてここで、授業前の学生の様子から、本当に福祉をしたかったのか、入学当初の学生の動機や自身の自我状態など、心理面で気がかりな面が見られたことから、授業時のレポートを分析した。

(図13)

##### 1) 「なぜ福祉の道を選んだか」入学当初の動機 (図13)

動機項目の選択肢から、2項目選択させた結果



では、様々な動機やきっかけが示されたが、最も多いのは「人の役に立ちたい」の72%、次いで「ボランティア体験で意義を感じて」36%、「家族の病気や自分の病気体験から」が8~15%、「家族に勧められた」15%など、自己目標の動機としてやや薄いものが多く、「高齢者や子供が好き」7%、「介護が自分に向いている」「高齢化問題に関心がある」「資格を取りたい」などは5%前後となっている。

##### 2) メンタルヘルス自己分析結果

コミュニケーションワークの授業のなかで、「自己覚知」の重要性として、「メンタルヘルスチェック」を行った。ヘルスカウンセリング学会方式の「パーソナリティ特性とストレス行動特性」に関する108項目を点数化した7分野の心理尺度を用い、自記式で実施した。(図14)

7分野について、尺度分類で「気がかりな」状態を示す結果の出現割合を見ると、「自己価値観が低い」が82%にもおよび、またストレスを感じやすい「特性不安度が高い」も60%に見られている。ちなみに他大学の自己価値観をみると、2002年のA大学・短大の学生結果では、大学生20%、短大生40%で、本大学の学生たちが有意に高いことが分かる。

また、「対人依存度が高い(自己決定できにくい)」や、「自己抑制が強すぎて自己主張できない」

図13 福祉を選んだ理由 (2項目選択)

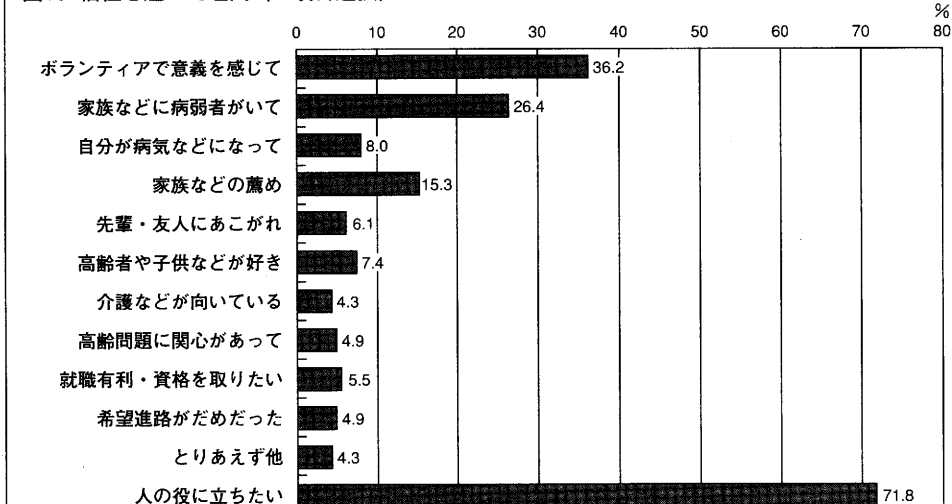
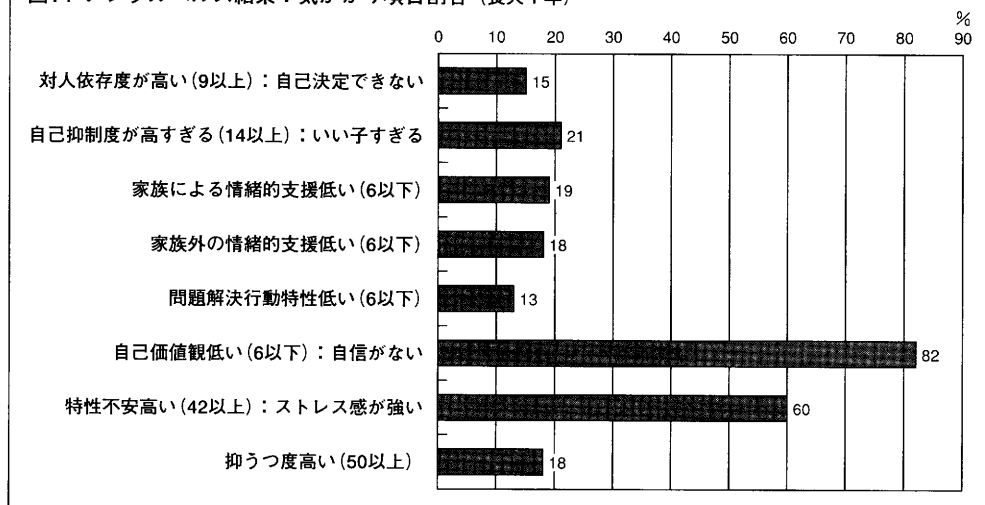


図14 メンタルヘルス結果：気がかり項目割合（長大1年）



(いわゆるいい子すぎる)」、「家族や友達の情緒的支援への認知が低い」、「問題解決行動尺度が低い」、などのある学生も2割近くに見られた。

1年次のこのような自信のなさを少しでも克服し、自信を持って実習に臨み、他者を支える力をつけるには、実技指導を多くした授業やボランティア活動・地域交流などの、社会参加への促しも重要である。

なお結果の中でみられた、重複して「気がかりな項目を併せ持つ学生」に対しては、本人の希望により教員による個別のカウンセリングを継続し、メンタル状態の改善する学生もかなりいた。

#### 5. 卒業生の就職先の実態からの検討

福祉4年制大学の介護技術教育の必要度を、客観的に見るために、最近3年間の長野大学福祉学部の卒業生について、本学キャリアサポートセンターの資料から、就職先と業務内容をまとめた。(図15-1、2)

① 就職先では、平成16年度でみると、老人系が54%で最も多く、年々5%づつ増加している。次いで多いのは知的障害施設の17%で、これも約4%づつのびている。しかし医療系で15%、児童系4%、身体障害施設や社会復帰施設が5%、社会福祉協議会も4%と低く、しかもこれらは年々下がっており、需要のあるのは介護技術を必要とする老人施設や知的障害施設である。

② また業務内容を示す職種を見ると、「介護職」が55%で、これのみが急増している。「支援員」は30%で、このほとんどは介護力がないと仕事にならない役割であり、合わせて8割は介護的役割を担っていると言える。一方MSW、PSWは4%と少なくとも年々減少し、保母や事務系などもごく少ない状況である事が分かった。

今後の学部のカリキュラム編成での考慮や、学生の実力アップ、社会ニーズに対する働きかけなど、課題は大であると思われる。

#### 6. 知的障害者施設における入所者の身体状況と職員の業務内容の実態

卒後の就職先第2位にある知的障害施設について、利用者の実情と介護の必要度を見るため、近隣のS障害者更生施設の資料から実態をまとめた。(図16)

##### ① 入所者の高齢化

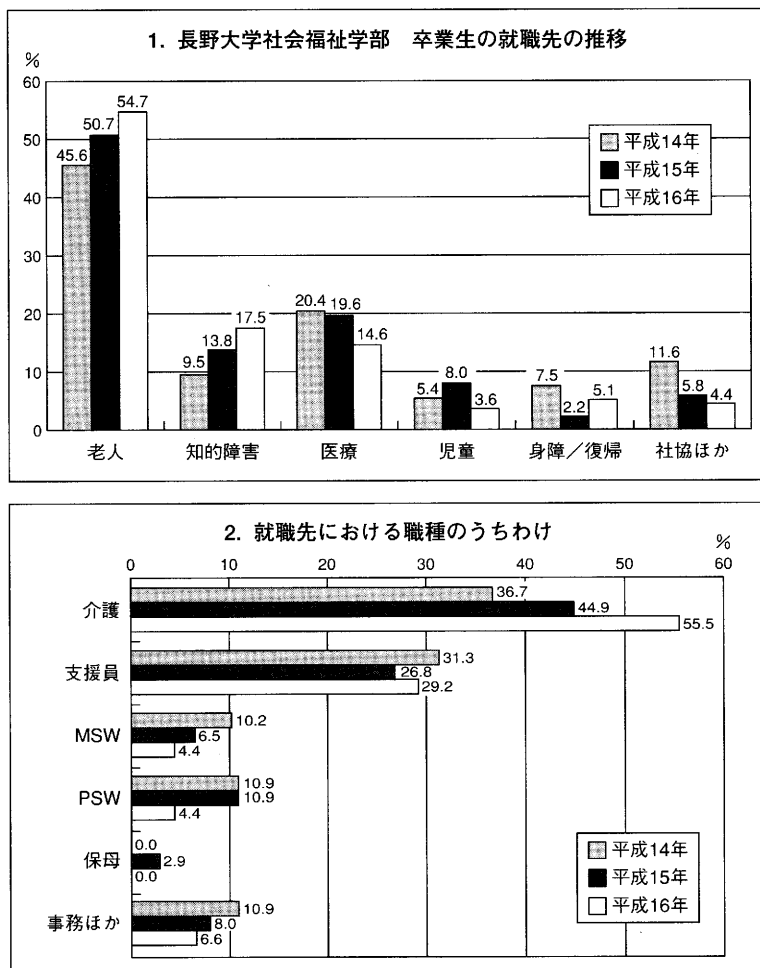
知的障害者50人の現在の平均年齢は53歳、うち60歳以上が24人48%で、80歳以上も2人みられ、20歳以下は0である。入所歴30年以上の人も22人と多く、全体に高齢化が進んでいる。

##### ② 障害の重度化と障害の重複化

療育手帳区分A1の「重度知的障害者」が88%、これに重複して体幹の機能障害10%、言語障害8%、聴覚障害8%、視覚障害6%などが加わり、何らかの重複障害者がある人は32%に見ら



図15 長野大学社会福祉学部卒業生の就職実態の推移



れる。

### ③ 要介護者のケア内容の複雑化

従来の障害へのケアに加え、高齢化に伴う病弱化や生活習慣病の通院治療、寝たきり（車椅子対応）者9人（4年前の2人から9人に）への対応。嚥下困難・肺炎による急変や繰り返し入院が増え、1年間に25人50%が入院し、これへの付き添いや生活援助が必要となる。また、骨折・転倒は年2～3人、人工肛門や胃瘻造設者もあり、身体状況の介護管理に目が離せない実情となっており、障害者更生施設と言うより要介護の老人ケア施設という状況になってきているといえる。

これは県内多くの知的障害者施設が同様の傾向であり、支援費制度以来、職員数は増員できないまま、QOLの充実の要求と、ケアの複雑さを抱

え、事故防止の配慮や、高度のケア技術が要求される状況にある。

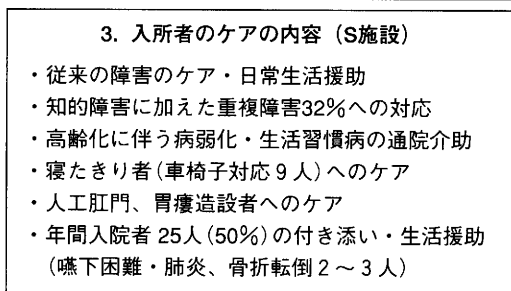
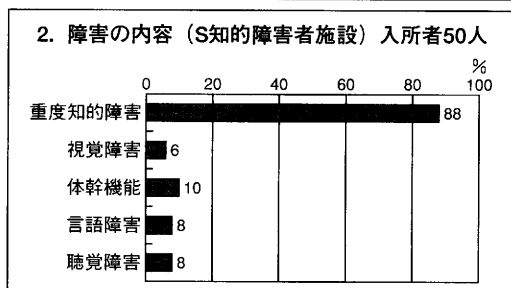
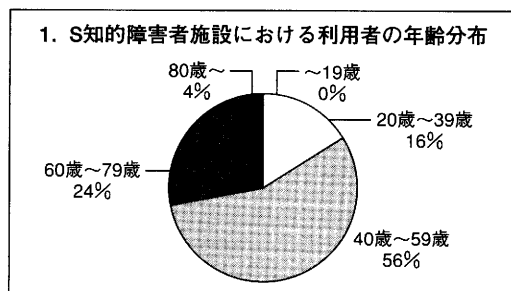
## Ⅳ. 介護技術1授業終了時学生意識調査結果をふまえた今後の課題

### 1) 福祉を目指す学生の介護意識と介護技術習得の必要性およびその意味の理解

学生の入学時の動機は、社会に役立つ仕事をしたいという漠然としたものであり、「自立を支える福祉」という意識も少ないが、介護技術の授業終了時にはその重要性も理解し、体験的実技の学習への満足度は高く、人間相手の直接的な仕事として、介護技術の重要性の理解が多少とも深まり、技術教育の需要の高さが伺われる。

しかし、「グループワークは嫌い」とか、「人と

図16 S知的障害者施設における入所者の状況  
平成17年9月 入所者50人



話すことが苦手」などの学生がかなりみられ、また授業の中で実施したメンタルヘルスチェックの結果でも、「自己価値観が低く」「ストレスに弱い」「やることに自信のない」学生像が8割にもみられた。少子化の中で育った若者達は、生活体験や社会参加が少なく、人の悩みや痛みの理解がしにくく育っているのも事実である。

チームケアで成り立つ福祉現場では、関連職種との協同連携の立場から、総合的視野と互いの業務内容の理解が欠かせない。特に介護保険制度における自立支援では、アセスメントとケアプランなどのケアマネジメントは、介護技術の理解無くしては不可能である。そして福祉を目指す学生自身が生活援助の技術の必要性を理解し、もっと技術を身につけたいと望んでいることから、今後は介護技術の授業の時間数を増やすなどの充実により、介護技術力に自信をつけ、介護を糸口に対人

援助に臨めるよう、学生を指導することで、効果的な福祉力向上が期待できると考える。

## 2) 社会が求める総合的ケアマネージ能力のある人材育成

福祉学部の卒業生の就職先をみると、過半数は老人関連施設であり、この3年間で需要が伸びているのは老人施設と知的障害者施設である。職種別では介護職と支援員が8割を占め、この対象の多くが老人系である。したがって、国民的課題である「快適な老後」を支えられる、高齢者への介護力のある人材を社会は求めていることは明確であり、心身の介護技術能力を高める教育の充実が重要と考える。

社会福祉専門職の援助に求められるのは、個別に利用者の悩みの部分に深く関わり、真に必要な援助として、「老後に向けたこれから先の生き方」への自立力を引きだし、生きる意欲を育てる役割であり、触れあって身体で悩みを理解し、援助の工夫をともに見いだして行くという、総合的ケアマネージ能力である。また社会福祉士の業務とされる相談業務は、多様化した相談内容の受容と、利用者の心身の理解やその対応、家族への技術的アドバイスなどであり、また介護事故の防止などの危機管理責任や、介護職員の労務管理を任される場合も多い。したがって日本の高齢病弱者の増加と相まって、これからの福祉現場では、介護技術を身につけた指導性のある専門職を、より多く求めているのが実態であるといえる。

## 3) 福祉系大学としての専門職の教育責任

① 現場実習の準備教育としての位置づけ：最近の3年次の現場実習の評価のなかには、目の前の利用者にも手も出せず、声かけも出来ないため、実習課題をこなすどころではない状況の学生がかなり見受けられるようになってきている。カリキュラム再編に当たっては、介護技術の授業は、3年次からの現場実習の準備教育として、2年次において技術Ⅰを設定し、通年2単位授業が適当と思われる。

② 3年次の現場実習は、まず全員が特養などの老人施設で実習し、ここで社会に1歩踏みだし、人間の理解として高齢者にかかわらせていただき、対人援助としての体験をさせたい。そして自信や理解力も付いてきた中で、

4年次の応用実習をさせ、自分の目指す分野の課題探求として位置付けると、充実した援助技術が培われると考える。見学のような実習をしていては、自己覚知も出来ず、対人援助の実習にはならない。学生自身が他者に直接向き合って、自分の力を養う必要性を自覚し、残存機能の理解と自立支援の重要性などの課題に直面し、自己成長するよう促したい。

- ③ 最近では、介護福祉士の資格がないと採用しないと言う施設も多くなっている。各専門職と互角に責任分担が果たせる人材が重要となる。高齢化の進む時代の要請に答え、各専門職と広く連携し、介護能力の高い学生を育成し、質の高い介護・福祉を地域社会に提供できるよう、時代をきりひらく役割として、総合的指導力を持った資質を持つ人材を福祉大学が育てなければならないと考える。
- ④ 特徴ある大学院にむけて：国では意欲ある現場職員に向け「認知症介護実践リーダー」

の研修に力を置き、介護現場の質の向上の推進をめざしている。大学院設置に当たりこれらを重点にした、特徴ある専門研究がなされることも、一つの方向性かと思われる。

#### 参考文献

- 1) 「ヘルスカウンセリングテキスト」Ⅰ・Ⅱ ヘルスカウンセリングセンター インタナショナル 宗像恒次・小森まり子・橋本佐由理著 (2002, 2003)
- 2) 認知症介護実践研修テキストシリーズ1・2「新しい認知症介護：実践者編、実践リーダー編」(2005)
- 3) 「大学生・短期大学部生に対するストレスマネジメント教育効果に関する研究」ヘルスカウンセリング学会年報41-47 (2004) 武田一・内田和寿
- 4) 「ヘルスカウンセリング事典」日総研 宗像恒次・橋本佐由理著 (2000)
- 5) 長野大学キャリアサポートセンター「卒業生の就職実態」 2002, 2003年、2004年度
- 6) 長野県坂城町S知的障害者施設入所者支援実績報告2004年度